

＜目的＞現在、我が国では食事に不足しているカルシウムを補うことに主眼を置いて、身の健康の管理の面から牛乳の利用が各方面から検討されている。我々は、前に牛乳の嗜好や牛乳に対する関心の深さと摂食状況についてアンケート調査を行ったが（安部・中野1991）、今回はそれらに続いて嗜好や牛乳の種類に関する関心の深さと牛乳の調理への利用状況等についてアンケート調査をまとめたので、その結果を報告する。

＜方法＞1988年6月及び1989年1月に約1週間、愛知県在住の女子学生（18～20歳）120名を対象に留置法によるアンケート調査を行った。調査内容は、牛乳を調理に利用する際の使用量、使用頻度及び料理内容について季節や嗜好との関係を合わせて比較検討した。

＜結果＞1. 季節による調理への牛乳利用頻度は、夏58.3%、冬40.8%で夏の方が多かった。また、1週間の牛乳を使った料理の摂食頻度は、夏冬とも1回が多く、その場合の使用量は、夏50～100 ml、冬10～50 mlが最も多かった。牛乳を調理に使う場合、季節を問わずシチュー・グラタンが最も多かった。しかし、夏は冷たいデザートプリン・ゼリー等が作られ、冬にはオムレツ等への利用度が高かった。2. 調査対象者の半数は、牛乳の好き嫌いに関係なく、調理に牛乳を使っていた。このことから、牛乳が調理に利用される場合には、好き嫌いの程度が飲用時に比べ表面化しないことが伺えた。

これらの結果は、牛乳を調理へ利用する上で、十分考慮すべき事項と思われる。